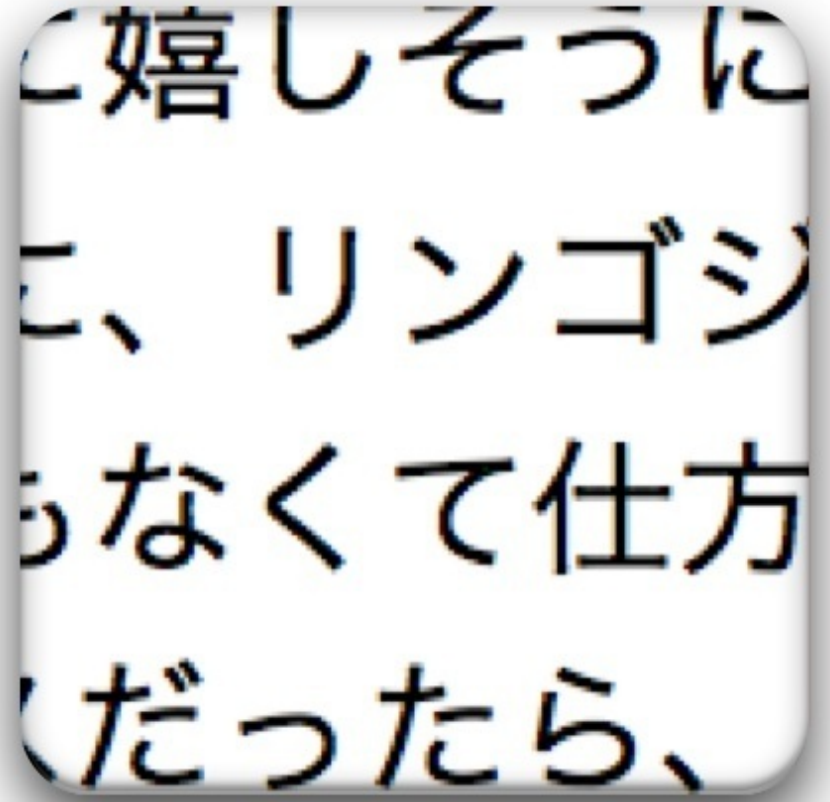
twitter短編小説集
「#断片小説(1～25)」



平木ノート

#断片小説
（1～25）

平木ノート

＜目次＞

はじめに
３

#断片小説Ｘ（１≦Ｘ≦25）
Ｘ＋９

あとがき
３５

さいごに
４０

はじめに

この本は、

毎日twitterにて、
@HirakiNoteが、
ハッシュタグ「#断片小説」で
投稿している作品を、
「わざわざどうして」１冊にまとめたものです。

「わざわざどうして」というのは、ネットさえあれば、誰でもtwitter上で最新の投稿を読むことが可能だからです。twilogでハッシュタグ検索をかければ、以前のものも含め、すべて無料で読めます。

（この書籍シリーズは今後有料の予定。）
「#断片小説」は、「どこかの誰かさんの何気ないツイートをタイトルにした作品群」です。この１つの特徴も「twitter上でこそ」、より明確に表れます。他にも、タイムリーなツイートをタイトルにするリアルタイム性、まれにあるタイトルツイート内の画像等、「twitter上でこそ」の価値が多数あります。

そんな「わざわざどうして」な電子書籍化にあたり、それなりに「この本でこそ」のデザイン

をしました。
改めて、添削・推敲をし
(twitter投稿時とは、全く意味
の変わった作品も)、twitterで
は活用しにくい改行等のレイア
ウトも工夫し、ページをめくる
たび１作ずつじっくり読める形
になっています。

初めて読まれる方はもちろん、
twitterで既に読まれた方も、
タイムラインから切り離され、
また違った「断片」、新たに
生まれた「１４０字の余白」を
楽しんで頂ければ幸いです。

ご参考までに、次のページに、最近の投稿の１つを「普段のtwitter上の形式で」載せておきます。(タイトルと本文で２通セット。)

１：
昨日の勝手にタイトルツイートはこちら。(続けて本文をつぶやきます。 #断片小説) RT @誰かさん: かえるるる
２：
「姉の部屋は趣味で集めたカエルのグッズで溢れている。お母さんが『お姉ちゃんの部屋だかカエルの住み処だか分からないわね』って言ったらカエルになったお姉ちゃんがゲコゲコ笑った。という私が見た夢の話で笑う姉。『大丈夫よ。カエルは、カエルが好き、なんて思わないもの』」 #断片小説 102

#断片小説

#1「(タイトルなし。)」
野菜ジュースをグラスに注ぎ席に戻ると、「わかるー」と彼女は、やけに嬉しそうに迎えた。
これが仮に、リンゴジュースもアンバサもなくて仕方なくの野菜ジュースだったら、どんな顔をすればいいんだ。
そうきっと今の僕のような顔をしてしまう。
彼女と付き合う理由も、好きだから、とは限らない。

※投稿開始当初のもの(1〜8)、思いつきで書いたイレギュラーなものは、タイトルなし。

#2「(タイトルなし。)」
博士は、物覚えが悪いのに、メモを一切取らない。なぜかと尋ねると、
「楽しいからだよ。色磁石を砂場に隠す遊びみたいでね。赤いのを探しても青いのが出てきたり、取り出そうとすると砂鉄や黄色い…、いや違うか」
ばつの悪そうな作り笑いをして、こう付け加えた。
「恵まれた職業、ということだな」

#3「(タイトルなし。)」

「ほら起きて！」

「んー……寝る子はよく育つ…
と言うじゃないかあ……
もう少し僕に育って欲しければーーー」

「あら、よく分かってるじゃない。寝れば育つうちはまだまだ子ども。あなたに、立派な大人の男になって欲しい、と願うのは妻として間違っているかしら」

「…いや、君はいつも正しいよ」

#4「(タイトルなし。)」
当てずっぽ探偵の事件慕。
「犯人はお前か！」
「違う！」
「お前か！」
「いいえ」／「違うよ」／
「どうしてそうなる！」
「じゃあお前か！」
「僕なわけないじゃないですか！」
「……ああぁもう俺だよ！俺がやった！助手の前にこっちを疑うだろ普通！」
今日もまた、持ち前の勘が鈍く光る…。

#5「(タイトルなし。)」
もし、君がかぼちゃで僕がフラフープだったら、僕は君にどう告白したと思う？

好き、って言ったと思う。

フラフープだよ……。それで、かぼちゃの君はどうするの？

私も、って答える。

……それにしても即答だね。

うん、だってそれ私も考えたことあるもん。

#6「(タイトルなし。)」

「……」

「おはよ」

「……見た…」

「ん、夢？」

「——けどもう忘れた」

「少しも覚えてない？」

「——全部」

「どんな気分？」

「——知ってた」

「よくあるよね」

「——過去も未来も同時に」

「…何それ？」

「見たんだよ。この物語の作者の顔を」

#7「(タイトルなし。)」
隠さなければいけない、と？
「はい…」
それは違う。
誰かの秘密の中身には、他人は
そこまで興味なんてない。
「でも、バレたらお終いです」
それがいけない。
隠すべきはその警戒、小さな穴
ほど人は覗きたがる。
「では？」
無防備に露呈した「それ」を誰
が秘密だと思うでしょう…。

さ、今すぐ「それ」をー。

#8「(タイトルなし。)」

「まるで俺が何かの回し者みたいなーー」

「自覚もないとは…。その胸のプリントは何だ！まさか本物のピザが転んだ拍子に張り付いたなんて言わないだろ。何かの…そんな不確かなものじゃない！今のお前はドレミピザの回し者だ！」

「だ…」

「企業コラボTを着るとはそういうことだ。生半可なー(以下略)

#9「TLすごく静かだ。」
１週間大学を休むことにし
ちゃった。
寝ては起きて、本を読み、
次第に寝ころんで、また寝て。
友達は、普段は明るく振る舞う
私を「なんだか面倒な奴」と、
きっと思ってる。
あーお腹空いた。
今何時？

マウスをわずかに動かすと、そ
うだった、結局ツイートしな
かった文章。
「あ……TLすごく静かだ」

#10「(タイトルなし。)」

彼は笑った。何かが嬉しくて笑ったのではない。むしろ悲しいに近い感情だ。彼自身その感情に気付くのは、月日が流れ、ふと今日と似た夕日に見とれた時かいつか。それまでは、この笑顔に感情なんてない。今はただ甘ったれた陶酔が、彼の横顔に影を落としているだけ。

#11「そば食べたい気分。」

「そば食べたい気分ってどんな
時？」

「そば食べたい時」

「それ以外ー」

「まあ10通りはあるよ」

「え？教えて！」

「年越し、引っ越し、僕うどん
君そばの昼、夜、朝、
突然のそばアレルギー宣告、
ラッキーアイテムそば、
そばの日に信州、

あと、今」

#12「スパゲティ食べたい。」

「そば食べたい時を入れて10
通り？」

「んー、じゃあおまけにもう一
つ。いらっしゃませーとすか
さずそば湯を出された時。
…よし、そば食べに行こ！」

「……」

「どうした？」

「……スパゲティ…食べたい」

彼の顔は凍りついた。
そして、彼女は言う。

「だって食べたい時が食べたい
時だもん」

#13「えらぼう」

「お前に選択肢をやろう。苦しんで死ぬか、楽に死ぬか」

「…それだけか？」

「……わがままな奴だ。
ありがちに死ぬか、
なんとか屋事件で死ぬか、
立ったまま、花嫁衣装でか、
上空何千mか、
首は北海道つま先は沖縄か、
なんだそれは！」

「お前、小説の読みすぎだ…」

銃声が鳴った。

もちろん、港の倉庫で。

#14「(タイトルなし。)」
彼の足音、潜り込んでくる音は、まるで雨の「降り始め」のよう。
ぽつり、ぽつぽつぽつー。
シーツの「擦れる」音、
「息」遣い、
マイクを置いていたらきっと、
「強い風」の音と変わらない。
時折、私の締まり声が「雷鳴」のようにテープに傷をつけるだけ。
雲が切れ、日が差すその時まで、ずっと繰り返しー。

#15
「いたい」「パーマなう。」
「探偵はどうしたんだよwww」

絶海の蛇狩汰島。中心に隆起するかの如き古城で、大万俵万太郎が死んだ。
血のダイイングメッセージ
「いたい」
とは、果たしてそのままの意味なのか。
その時、探偵の助手は浮気調査中。渋谷の美容院向かいのカフェから報告メール
「パーマなう。」
事件はまだ始まらない。

#16「雨の中の散歩もなかなかいいですな！」

「雨の中の散歩も
なかなかいいですな！」

老人はそう言って、幸せそうな笑みを私に向けた。
私は固い笑顔を返し、心の眉をひそめた。見ず知らずの老人に突然話しかけられたから、ではない。老人と私、互いの目に映る景色があまりにも違ったからだ。
その広げたビニール傘を叩く音も、老人だけが聞いている。

#17「あたしも実はAKBだからね」

元AKB工作員の男が、重たい口を開き、話し始めた。

「指令は…48が楽曲を通して伝達…、全国の工作員は各々の解釈で…それを実行する。俺にも分からないんだ…。結局AKBとは何なのか。なあもういいだろ！約束通り俺を安全な場所にーー」

あたしは男の耳元で囁く。

「あたしも実はAKBだからね」

#18「らすと」

らすとイニング
らいとの選手が
らいむをかじって
審判慌ててたいむ
　球場全体たいき
たんきは
そんきと
みなのんき
てんきも良いし
ていきットイージィ
えいきを養う両陣営
えいさ
ほいさ
と、ピッチャーだけがキャッチボールの今日は夏至

#19「(タイトルなし。)」

もう１年前か。友人が差し入れに生のトマトを買ってきた。僕は、明確な拒否ではなくどことなく食べようとしない様子がきっと面白いぞ、とひらめいて、彼が一人トマトを平らげるまで、大げさなくらい他の話題に終始した。

なぜだろう…今になって彼がうまそうに頬張ったあのトマトが食べたくて仕方ない。

#20「もうだめだとおもう、
　　おはようございます」

「平和の敵は狡猾になっただけで、気付けば結局世紀末。だな？」

「もうだめだとおもう」

「一子相伝の暗殺拳などなくとも身近な挨拶からこの世紀末を救おう。ブロークン・ウィンドウ理論！だな？」

「もうだめだとおもう」

「朝の挨拶を忘れていた。おはよう」

「もうだめだとおもう、おはようございます」

#21「(タイトルなし。)」

「君は、自分が今まで何本の毛髪を食べてきたか、分かるかい？」

「あ…いえ」

「僕は分かるよ」

「そんなのいちいち数えられませんし」

「いちいち数えちゃ悪いって言うのかい、食べさせられかけた本数だぞ！

昨日の茶碗に１本。

一昨日のオムライスは３本！

……断言しよう。

今まで僕は１本も食べてない！」

#22「電車ってかっこいい！」

某大学、鉄道友の会、部室。

「詰まる所、敷かれたレールの上しか走らない潔さなんだ」

「いや、やっぱり時代を語るあの音だろう」

「僕は、左右、前後がそれぞれ対称のあのフォルム。最近は、ドア側を前後と仮定し、蟹歩きでホームに滑り込んでくる姿を愛でています」

「…お前は」

「…変わってるよなぁ」

#23「ひきこもらないとだめだ
な。」
「自由」や「平和」は廃れてしまった。
人は、「名前」をつけ「使い古す」ことで、「通過した」と錯覚する。この性質を利用して、過剰に自由や平和を叫んだのは、敵側のスパイだった。
「煽られるな。ひきこもらないとだめだな…もっと深く…」
人類総引きこもり時代。
仮想現実の四畳半一間における決起。

#24「こんな道あるいてる
　　(夜道、街路灯の写真)」
深夜の仕事が終わるといつもこの時間。
「（今日も散々だった…もう
　人とは会いたくない）」
そんな帰り道、街路灯下の人影にどきっとする。
「（…あれは工事中の看板だ。
　何度同じことで…僕の方が
　驚かされてどうする…）」
丑三つ時を過ぎた頃、ここは近所で有名な、気弱な妖怪が出る山道。

#25「私の先祖は人さらいでございます。」

「私の先祖は人さらいでございます。代々そうでございましたが、私の父はあろうことか人助けをし、それ以来、一族からは人すくいと罵られ、私もそんな父を恥ずかしく思ったものでございます。
何の因果か応報か。今はこうして全国巡る金魚すくい商。
さあすくってらっしゃい！
さらってらっしゃい！」

あとがき

あるtwitter作家は言いました。
「140字、それは短くも長い。
止まっているようで動いていて、平面のようでどこまでも奥へと続く。まるで一枚のだまし絵のようだ」
半人前twitter作家の平木ノートは、
「ただただ短いな…ぎゃふん」
と言わされながらも、頭を捻る毎日です。
あるtwitter作家の上の発言に文句をつけるのであれば、
「実際は140字も使えない」
ということでしょう。

僕の場合、本文に使えるのは「128字」。（これでも日本語ハッシュタグのおかげで5文字増えました。）
この本ではそれが、正真正銘の「140字」になりました。やっと「twitter一人前」です。
#断片小説のtwitter版と電子書籍版の差は、分かりやすい所で言えば、この「12文字」。
この本に収録された「#1」に関して言えば、twitterで投稿したのは３ヶ月前のことでした。
twitter版との差で、分かりにくい所で言うと、この「(客観的になれる)時間」です。
「時間」を経て、プラス「12文

字」。これにより、電子書籍版は、劇的に良くなったと感じています。（今後有料でリリースするのなら当たり前ですね。）
話は少し変わりますが、twitterというツールが注目され始めた頃、「結局何をするもの？」とよく言われていました。
明確に「何をする」が決まっていないツールというのは素晴らしい。コミュニケーションに使おうが、ライフログとして使おうが、好きな芸能人に密着できるという価値を見出そうが、それがあなたにとってのtwitterの意味になる。現に僕は、twitterを始めてからしばらくの間、そ

の価値を見出せませんでした。
ただ一つ言えるのは、何か色々なことが「出来るようになった」のは間違いない。
これからも人の数だけ、twitterを使って、何かが「生まれる」。
この140字の小さなだまし絵「#断片小説」も、「twitterがなければ生まれなかったもの」には違いありません。

さいごに

あとがきのあとにまだ書く
「しつこさ」は、新米作家のくせになかなか肝が据わっているな、と自分でも寒心しています（ぞっとする、の意）。
平木ノートは、作品を読んでくれた人に向けて、毎回ホームページで＋αのコンテンツを公開しています。
今回はこれ。
「アンケートを取って、読者が選ぶベスト１の断片小説をちょっと長く書く！」
です。
「ちょっと長く」は、140字に0を一つ足したぐらいでいい

よね？（ページをめくると、そこはタメ口だった…）

ということで、アンケートをホームページにて募集しています。

・Googleで「スクランブルデパート」と検索したトップに平木ノートのホームページがあるので、その「２Ｆ」、断片復元商店「#ReStore」にフォームがあります。
・Androidアプリで読まれている方は、Marketの当アプリのページにある「デベロッパーのウェブページにアクセ

スする」のリンクから直接
フォームのページに行けま
す。

アンケートの対象は、この本に
収録の「#断片小説1～25」。

作品を「２つまで」選んで、
送信ボタンを押すだけです。

印象に残った作品があれば、ぜ
ひご参加下さい。

では、また。

小説＆アプリ作家

平木ノート

＜twitter＞
(ご意見、ご感想を心待ちにしています)
@HirakiNote

＜twilogについて＞
webサービス「twilog」にて、ユーザー名「HirakiNote」を検索してもらうと、ハッシュタグ「#断片小説」がまとめて閲覧可能です。
(現在は「#断片小説」ですが、以前のものに関しては、

1～50「#short_cut」
51～56「#断編小説」
のハッシュタグがついています。過去の投稿を読まれる場合は、これらのタグで検索してください。）

＜HomePage＞
(今後のリリースなど)
「スクランブルデパート」
→サイト名をGoogle検索すると、一番上に出ます。

twitter短編小説集「#断片小説(1～25)」

http://p.booklog.jp/book/33853

著者：平木ノート
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/hirakinote/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/33853

ブクログのパブー本棚へ入れる
http://booklog.jp/puboo/book/33853

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社paperboy&co.